

「TPP を題材とした課題探究学習の試み」(安野実践) へのコメント

立命館大学非常勤講師 河原 和之

安野先生(当時 大阪教育大学附属平野小学校)の授業は3回程度参観した。まずは、今回の「TPP」という難解な授業に挑戦されたことに敬意を表したい。安野実践の特徴は、「ねらい」を明確にした単元の計画性である。また、1単位時間の授業では、多様な観点からの「資料」提示、子ども同士、そして、教師と子どもとの「対話」により「見方・考え方」が深める授業である。1単位授業の「導入」「展開」「まとめ」はもちろん、単元の1次から2次・・・10次へと、スパイラルに“化学変化”をおこす授業である。ここでは、その変化の要因を分析する。

特筆すべきは、多面的・多角的な「資料」プリントと他者との「対話」である。

本授業の「TPP とわたしたちのこれからを考えよう」のプリントは、以下の構成である。左半分には、TPPの「メリット」と「デメリット」が示されている。具体的には、「関税の役割」(国内産業の保護)、「高い関税がかけられた農作物」「TPP 交渉参加国」「貿易を増やして経済を活発に」である。右半分は「工場従事者」「消費者」「農業や酪農家」の立場から多角的な見解が示され、「環境問題は?」「食料自給率は?」「食の安全は?」と疑問が投げかけられている。本プリント通した授業は、TPPについて「知る」「わかる」だけではなく、その「是非」について“葛藤”“対立”“矛盾”があり、価値判断、意思決定を促すよう工夫されている。つまり、多面的・多角的な「資料」と、多様な価値観をもつ他者の「異見」との“ぶつかり”により、子どもたちは「もやもやするけど楽しい」授業を体感できるよう構成されている。

次に他者との「対話」における工夫についてみていこう。

第一に、安野実践では多様な「対話」が志向されている。「書籍」「ICT」の活用はもちろん、テーマと関係する「人」との対話である。TPPにおいては「農家」の人であるが、学校にゲストとして招請される場合もあるが「遠隔授業」の手法で、画面上に登場するケースも度々である。つまり「ほんまもん」からの学びが、常に単元構想の中に位置づけられている。

第二に、座席表に整理した「ふりかえりシート」である。これは、学習した“考え”を、座席に合わせて記述し、全体化する手法である。これにより、前時で「他者」が、「どう考えたのか?」「何を思ったのか?」を共有するとともに、他者の意見から、自分の意見を相対化することが可能である。

第三に、レポート作成だけではなく、他者の作成したレポートに「感想」「質問」を記入し、相互に交流するというものである。「レベルアップカード」(他者評価)とのネーミングであるが、見解の異なる部分については、互いに意見交換する場を設定するきめ細やかな手立てが行われている。

「対立」「葛藤」が思考を「深める」

子どもの変容についてみていこう。工業面から考えると製品を輸出しやすいのでプラス→消費者も安く食料品などを輸入できるのでプラス→自国の産業が守れないのでマイナス→農家にとっては安い農作物が輸入されマイナスという「対立」「葛藤」により、子どもに思考の「深まり」が見られる。また、輸入品に対する環境への配慮、農家への支援、食の安全等、TPP 推進のために克服しなければならない課題について、未来を「そうぞう」している。

最後に

小学校5年生に「TPP の是非を問う」テーマはハードルが高い。中高校生も同様である。10単位時間に及ぶ思考との「葛藤」に、リタイアする児童・生徒もでてくるであろう。授業には「驚き」「切実性」など“ワクワク感”が不可欠である。TPP が、現在、未来の「じぶん」とどこで繋がっているのか?「対象世界」「他者」「自己」の3つの軸から学びを「深める」ことを通して「世界に没入していく学び」をつくっていきたいと思った。